

「試練を通して残るもの」(要旨)
聖書箇所：マタイの福音書15章21~39節



【1】 熱心な訪問者

イエスは、海沿いの港町ツロとシドンの地方に退かれました。この旅の目的は宣教旅行ではありませんでした(参照マルコ7:24)。休息を目的としていたのでしょうか。ところがその静寂を破る叫び声が響きわたります。声の主は異邦人であるカナン人の女でした。彼女は娘のいやしを必死にイエスに願い続けました。イエスは彼女の訴えに応じず、逆に「わたしは、イスラエルの家の失われた羊たち以外のところには、遣わされていません。」(マタイ15:24)と突き放します。しかし彼女は諦めずに「主よ、私をお助けください。」と懇願します。イエスは更に「子どもたちのパンを取り上げて、小犬に投げてやるのは良くないことです。」と続けました。イエスの一連の返答に女が傷付き、あるいは腹を立ててその場を離れ去っても不思議ではありませんでした。しかし彼女は「子犬でも主人の食卓から落ちるパン屑はいただきます。」と食い下がったのでした。この熱心な訪問者とのやり取りを通し、イエスは「女の方、あなたの信仰は立派です。あなたが願うとおりになるように。」(マタイ15:28)と応じられ、彼女の娘は「すぐに癒された」のでした。

【2】 イスラエルの家の失われた羊

イエスは、助けを求める女性に即救いの手を差し伸べることはしませんでした。一体なぜでしょうか？

第一に、その「時」が来ていなかったからです。イエスの返答(マタイ15:24)から、イエスの公生涯の宣教の対象が「イスラエルの家の失われた羊たち」(マタイ10:5-6)であったことがわかります。イエスの十字架と復活の後、イエスの命令は「あらゆる国の人々を弟子としなさい」(マタイ28:19)となり、福音宣教の対象が広がっていきます(使徒1:8)。当初異邦人宣教に戸惑ったペテロも、「神は、イスラエルの子らにみことばを送り、イエス・キリストによって平和の福音を宣べ伝

えられました。このイエス・キリストはすべての人の主です。」(使徒10:36)という確信に至りました。

このように、約束の実現には順序がありました。イエスとこの女性が出会った時点では、神の恵みを受ける道が異邦人にはまだ明らかにされていませんでした。彼女はその順番を飛び越えイエスに熱心に願ったのでした。

第二に、イエスは彼女の信仰を試されたのでした。イエスは信仰を試す時に突き放すような物言いをされることがあります(参照ヨハネ2:4)。彼女が助けてもらえる権利が自分にあると考えていれば、イエスの対応に躓いたでしょう。彼女は自分を「子犬」と認めた上で、パンは無理でも落ちるパン屑は口にさせてもらえると答えたのでした。主イエスの救いを当然の権利ではなく、取るに足らない者に与えられる恵みとして応答したのでした。本朝の聖書箇所で「イスラエルの神をあがめた。」(マタイ15:31)のは、神の救いから遠いとされた異邦人でした。

【3】 試練を通して残るもの

神は私たちが時に試されます。それは、私たちの心の中にあるものを明らかにし、私たちを練り、きよめるためです。カナン人は危機に瀕した娘のゆえに叫びました。自分の願ったように救いの手を差し伸べてくれないイエスに、彼女はひたすら訴え続けました。その直向きな信仰に、「そこまで言うのなら…」(マルコ7:29)とイエスは心を動かされました。一方で、イエスに対して心を頑なにする者には、たとえ「イスラエルの子ども」たちであっても力ある働きをなさいませんでした(マタイ13:58)。

▷ 予期しない苦難は私たちを動揺させます。そうした試練の中で諦めることなく主と向き合い、祈り願うことができますように。試練は信仰者を成熟に向かわせるのですから(参照ヤコブ 1:2-3)。